

新刊「寺参拝」

ゼンニンジせいかん

発行日 平成11年3月1日 | 四月刊



仏様の「参拝」(丁寧な)

お前たる者にてぞよ

願も体も名前も姓も

お前たる者にてぞよ

願も宿も親もけちも

お前たる者もお前様も

お前たる者にてぞよ

幸も大幸も尊ひも



「これにわざ。お片仮じしたか?

小町せこわなりでゆが、詔の「紹介
をやせにこただもあした。

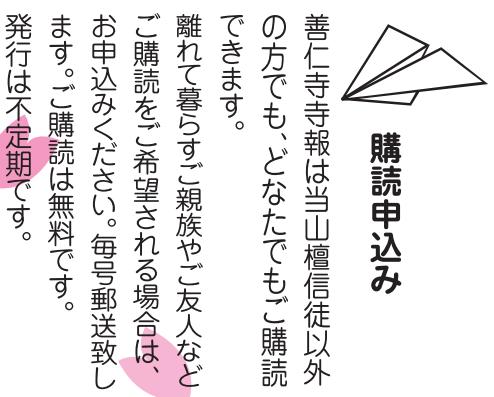
」の詩は石川県の能登市やん
の寺報「法友」を編集、執筆されて
いる藤場美津路さんとのつぶやかれた
詩です。

私は以前、岐阜県の材木屋さんで
偶然この詩を見かけて、「あら」と心に
残つてこました。

「なんぞ自分でが…」とか
「この人やえいなれば…」
とか、嫉妬や羨等感を自分の身に
感じたりと、ありますよね。

この詩を見た時に、「やあな」「一度
よろしく思つてなかつた」自分を目に
当てられたよつた仮持物になつ
ました。

浄土とは面おもてを見つめりふかひ
開かれていく世界だと感つます。
でも自分が思つてゐる自分で本当に
間違ひなじですか。他鄰によひて
知らわれる自分がいるかもしませ
せんね。そんなじ縁が今年もある
ことを願つて、この詩を読み返して
います。



講読申込み

新刊寺報は毎月檀信徒以外
の方でも、どなたでも「購読
できま。

離れて暮らす「親族や」「友人など
」購読を希望される場合は、
お申込みください。毎月郵送致し
ます。「購読は無料です。

発行は不定期です。

寺報は時間内に
お願いします。

当日の参拝時間は

午前の8時から午後4時

の間にね願いします。

閑門は午後4時半です。

彼岸期間など特別日を除き、時間内
に参拝して下さい。

当山は地形的に段差や坂が境内に
多くです。近年、境内に落ち転倒
などの事故もありました。

特に夕刻を過ぎて足元が暗くなると
墓地への入場は大変危険です。

墓地への入場は大変危険です。

特に夕刻を過ぎて足元が暗くなると
墓地への入場は大変危険です。

墓地への入場は大変危険です。

墓地への入場は大変危険です。

墓地への入場は大変危険です。

墓地への入場は大変危険です。

発行人 青山 薫
発行所 東京都文京区小石川4-1-1の森
眞宗大谷派 石川山 善仁寺
電話 03(3211-1)4700
ファックス 03(3211-1)4701
メール kokpm386@ybb.ne.jp
ホームページ http://zenninji.web.fc2.com

特集

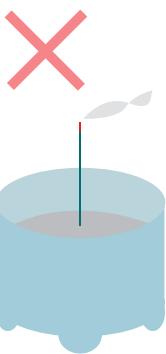
仏壇と給仕作法 2

前回の続きです。お内仏の莊嚴はもう大丈夫ですよね?

では、給仕の作法を学びましょう。毎日、ご本尊に向かつて礼拝することから一日は始まります。

まずは、灯明と蠟燭に火を灯します。

次にお線香に火をつけて土香炉に置きます。注意点として、お線香を立てません。香炉の大きさにあわせてお線香を折って、火のついた方を左側にしておきます。



そして、手を合わせてお念仏です。
わあ、いじで勤行をします。何を
読むかといいますと

一、正信偈(草四句目下)

二、念佛(同朋奉讃)

三、和讃(〃)

四、回向(〃)

五、御文



「」のように給仕します。毎朝、これらのこと皆様、ご自身が朝ご飯を食べる前にします。「」ことを「晨朝」とい、夕方に「」ことを「夕事勤行」と呼びます。※御仏供は朝のみで結構です。

です。カツ「」内は読み方を表わしています。(但し、伝統的には「」の読み方ではありません。本式でやると大変時間を要しますので、現在は「」の読み方を使って毎日の勤めすることをお勧めします。)この為に、「お経の練習会」をしていますよ。

勤行が終わりましたら、御仏供を差し上げます。御本尊に差し上げるお供えの「」です。

一般的には炊きたての白飯を円筒形に仏器に盛ります。

毎日の生活の中であるからこそ、静かで毎日するとなると大変ですね?でも、毎日朝夕のひと時、お仏前に拝跪し、いろんなことを思ったり、考えなかつたり、感謝したり、反省したり、泣いたり、笑つたり、怒つたり……。

「おわり」

編集後記

ご利用にあたって
●当山ご参詣以外の方の駐車はできません。
●騒音など、近隣の方への迷惑となる行為はおやめ下さい。
●長時間の駐車はご遠慮ください。
●場内での事故、盗難などにおいての責任は一切負えませんのでご了承ください。

駐車スペースが増えました

昨年末に新たに善仁寺専用駐車スペースが増えました。左記図のよう、正門向かって左側約10Mより入れます。4台まで駐車できます。混雑時のみの開放となります。通常時は従来通り、正門内側へ車をお入れください。



二郎田の発刊です。冒頭で紹介しました藤場さんはなんと60歳を越えて30年間寺報を書き続けておられます。頭が下がります。少し補足しますと、藤場さんが「仏様の」とば」を書くまでは、「大嫌いな自分自身」との激しい葛藤があったそうです。「汝そのままで、既に仏の道にあり」という言葉と出会い、ある先生の「法話に出会い、念仏の教えに出会い…、という軌跡がありました。

善仁寺からのお知らせ

